

---

# ひみつのひ

廣瀬 るな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひみつのひ

### 【Zコード】

Z5648D

### 【作者名】

廣瀬 るな

### 【あらすじ】

ほどよく均整のとれたそこそこモテ系スポーツ少年。そのクールな言動とは裏腹な、振り回されっぱなしの恋模様のお話。阿呆な友人達が彼をもりたててあります。

## 第一話 俺、絶好調なのか？（前書き）

らぶえつち、いたしております。12歳以下のおこりあは、ページ戻つてね。

## 第一話 俺、絶好調なのか？

火照る体にシャワーを浴びて、俺はゆっくり部室に向かった。

篠崎陽介 18歳 自称イケメンサッカー少年。

とすぐそこで悩める少年A に出会う。

「陽介、俺最近、ヤバいんだわ。」

つて、どうしてって聞くだろ？

「なんだか寝ても覚めてもミキちゃんの事ばっか考えちまうんだよね～」

つまりはさ、

「はいはい、恋煩い？ のろけ？」ちがひもまだ。つき合ってんだ

からそんなもんじゃねえの？

俺は無造作に部室に入る。

「ういっす。」

相変わらず埃っぽいこのお部屋。

「それだけじゃなくてさ。」

阿部氏はしつこく食いついてくる。

「なんて言うのかさ、この、若い情熱を。」

身悶えるなよ、こんな所で・・・・・

「爆発させたい訳よ。」

まあ、言いたい事は分かるぞ。だつて俺たちお年頃だからな。

「だからさ、相談のつてよ、陽介。お前彼女いるつて噂じやん？」

「人の事なんかどうでも良いだろ。それより良いんじやネエの？ いたしても。彼女だつてその気あんでしょ？」

「でもさあ、彼女初めてっぽいのよ。」

彼は頬を膨らませた。ガキか、お前は。俺はミキちゃんのほつそりした足と、なんだかいつも濡れているような唇を思い出した。

「誰でも初めては有るだろが？」

真っ昼間のラブホ街を男と手を組んで歩く彼女を知っている、そんな思い出を俺はきわめて忘れる事にした。当人同士の問題だしな。「つき合ってんだし、正常な高校生ならありでしょ。手え出さないでいるといンポヤローだと思われるだけだし。」

嘘か本当か、初恋に悩む少年は、唸る。しかもじつこい。

「うへへ」

俺はバッグの中から “ダーダン” というスポーツマッスル系男の子の読み物雑誌、というのを出した。

これ、毎回テーマが同じで（逆三角、とか、腹筋、とかスリムとか、見せボディとか）マンネリなんだけど、買うのが止められないんだよね。きっとあれだ、女の子がファション雑誌買うのと一緒にだな。

ページをめくる俺に、阿部氏

「陽介は」

つて、マジ、しつこい。自分で考える。俺の頭を使うんじゃねえ。それに、さつきから周りの奴らが興味津々で聞き耳たててんのがわからんねえかなあ。

「溜まんない訳?」

そう来たか。

「まあね。」

「もしかして、全然おつ起たない方ですか？」

つてお前、そんな事ねえだろう。そんな済まなそうな顔するなよ。むしろ反対だつて言つの。俺はため息をついた。もう、言つてやれ。「俺にも俺の悩みが有る訳。俺の場合トレーニングして疲れるだろ? で、そのあとしつかりクールダウンなんかすると、反対にやりたくなつてしまふがなくなるんだよ。疲れてでかくなるなんて、おやじみてえだ。」

「つうことは、何ですか? 今陽介は、やる気満々? ?」

違うよ! ! ! で引くなつ! ! 僕にその趣味はない! ! 全く。そん

な言葉を俺は飲み込んだ。クールダウンが終わってしばらへしてから的事だうて言つた。

「俺の意思とは関係なく、起つちまうつてことだよ。」

するとなんだかそばにいた工口眼鏡の透が

「陽介、バイアグラの話か？」

と来たもんだ。

「いや、そうじやなく、ここに、その氣もないのに起つらじこから。」

「発情期？馬並み？」

お前なあ・・・・。とその時だ。

「馬鹿だね。」

・・・・・。その声は、部屋の奥から聞こえて来た。聞き間違え  
るはずは無い。野口朝香。サッカーのコーチの妹で、なんちゃつて、  
マネージャー。学年一の秀才でジャージの似合つ女子ナンバーワン。  
その眼鏡の奥で両の目がきらりと光つた、気がした。

ひみつのひ つづく

## 第一話 俺、絶好調なのか？（後書き）

どこでもいそなお年頃の少年のお話です。熱中する趣味も有り、悪友との仲も良ろしく、今時らしいルックスでクールに構えていて。そんな“傍観者的彼”なのですが、自分の恋愛には不器用に生きています。

## 第一話 恥ずかしくないのかよ、お前ひ

彼女は気まぐれに引いていた一年生を尻目に、俺の所までずんずん近づいてきた。それからダーダンをひょいと取り上げ、

「交感神経と副交感神経の問題だよ。練習中で緊張したり、どん底まで疲れていると交感神経が働いて、防御システムが作動しているから、起きたくなるんだ。つまり、子づくりに適さない状況だと体が判断するという事だ。反対に、リラックスしている状況だと副交感神経が作用し、生活における次の段階、つまり体を休めたり、子孫繁栄に励む事を推奨する、こういう事だ。」

それからダーダンをペラペラとめくつ、

「56ページ。」

と持っているマーカーで印をつけた。

なんてヤツ……。

みんなが覗き込むそこには、トレーニングにまつわる質問の項目が。その上、まさに俺の悩みそのものが載っていた。

「お疲れマラつて言うんだあ……。大人の言葉だね。」

阿部氏がなんだか納得した顔で頷いていた。

あぐくに彼女は

「だから、君は非常にいい状態という事になる。しつかり負荷かけて練習して、その疲労もしつかりとれて、なおかつ自分の生活に励める、ということだ。」

「見習わなきゃいけないなあ」

透がにやにやと俺を見る。

「それか、練習量が足りず、よつて負荷が足りないから回復が早い、かだな。陽介君。」

彼女はポーカーフェイスで部室に嵐を巻き起こし、去つていった。

しかも、どこからどこまで聞いていたのか、そのドア越しに本物のマネージャーの小川よしのが真っ赤な顔をして立ち去っていた。

その帰り道、透が俺の顔を小突いた。

「これで練習量増やされたら、お前のせいだぞ」の野口ややかね。

んなことねえだろ。俺は肩をくめた。

「それよりさ、あの噂知ってる?」

チエリーな阿部氏が嬉々としてターンをかまし俺の顔を覗き込む。

「委員長、野口コーチとつき合つてよ。」

委員長といつのは、野口朝香の事だ。

「まさか。」

透が渋い顔を作る。

「それがマジでさ。マジ、兄貴とつき合つてるんだつて。この前い  
ちゃこいてたつて、ミキが。」

「血のつながりないつて聞いてたけど、本當かよ。」

「だろお? しかも二人暮らしつて、コーチ言つてたじやん? 義理の  
妹と毎晩同じ屋根の下、あんな事も、こんな事もしたい放題・・・  
・つて! ...」

思わず俺はこの童貞ヤローの頭を鞄ではつたおしていた。

「んな事、口をかけても言つんじやねえぞ。聞かれたら、シャレなん  
ねえ。」

それから、小さく聞こえていた足音の方に振り返つた。

「今のは、聞いてないよな。」

すると小川が困ったように、曖昧に首を振つた。

## 第一話 恥ずかしくないのかよ、お前り（後書き）

陽介君の本命は誰でしょう。彼女のキャラクターが先に思い浮かんで、そんな彼女にお似合いの男子“陽介君”をイメージしてできたお話なんです。

## 第二話 他人の事と自分の事は全く別ものってヤツね

いつもの双喜亭でラーメンライスを食いながら、結局ここにひりとだべる事になる。せつかくの金曜の夜なのに予定が無いのがちと寂しい。

「でもや、陽介、小川ちゃんとつき合つてて噂有つたけど、あれはどうなつたの？」

猫舌の阿部氏はハフハフしながら、ラーメンを高く持ち上げますつている。

「でまかせだよ、んなの。それより、てめえの心配しりよ。」

「でもさあ、さつき一緒に帰つた時の小川ちゃんの田、いぬひみの女だった……！」

俺はこいつのラーメンに思いつきり胡椒を振つてやつた。黙れつて。涙目のヤツを良いきみだとほくそ笑んだ時、俺の携帯が静かに震えていた。

どうせ母親が帰り遅いからビンカで飯食えつて話だとその時は思つたけど……

「！」

メールの内容に俺は思わず、息をのんだ。

“ 来たければ”

たつたそれだけ。

その時の俺の顔を後で阿部氏は

“ 阿呆面”

と言つたらしいがそんな事、どうでも良かつた。

俺は店を飛び出し、それから

“ 悪りい”

と言つていた、ハズだ。

彼女の家はマンションで、そのエントランス、一時でも惜しけつ

て、息切らしたまま1201号を押す。

エレベーターがもどかしく、一気に駆け上がりたくなつて、気持ちを抑える。俺つてもしかして阿部氏よりガキ？

ブザーを押しても返事が無くて、もしや、開いている？ってノブをまわすとそのまま反転し。

“ゲート開けたんだから、入つて来ていいんだと思わないのか？”初めての時に言われた言葉を思い出す。

その戸口の向こう側、掃除機をかける彼女が笑つた。

「早かつたな。」

と。

ひみつのひ

つづく

## 第三話 他人の事と自分の事は全く別ものってヤツね（後書き）

他にお品物書いてます。よろしかったらいちんになつてくださいね。甘辛い恋愛が大好きだ~

## 第四話 僕が誰の事好きか分かつてんの？

彼女は家でもジャージだった。そのくせ細い手首のぞく袖口はがほがほで、華奢な体をより纖細にみせていて、どうしようもなく女らしいから憎いと思つ。それから指を俺の首の後ろにそつと回して、乱れていた襟を直してくれて。その緩慢な仕草に俺の脈が一気に上昇する。

俺が戸惑つから、彼女がからかうように微笑んでほんの少し体を引いた。つまり、あがつて来い、といつ仕草。

俺は彼女のベットを拝借し、その前で彼女が横座りで見上げている。

俺は阿部氏に劣ららず、落ち着かなくなる。  
つてか、やっぱ、それ、反則。

眼鏡の上からのぞく長いまつげがわざとじつこぼじつと上下した。

「そういう事だったのか。」

といわれ、何の事かすぐ判る俺。

彼女の物言いは独特で、必要最低限しか話をしない気がする。でもそれは彼女が俺の事を良く知つていて、俺の思考を読んで放つ言葉だから、すべてのつじつまが合つてる訳で。

「いや、あれは・・・・・

言ひよどむ俺の膝に、彼女はこりんと頭を寄せた。

「ほら。」

それは彼女らしからぬ言葉。その吐息が俺の指先をかすめた。

「抱きたいだけなのかと聞いているのに。」

そんな事は無い、という言い訳よりも、こまかす心が先走ってしまつて・・・・・

「つてお前がさあ・・・・・。」

俺は彼女の肩を掴みむりやり引き上げ、

「お前が俺とつき合つてゐる事、言つたなつて誰つからだ？」

「つて、不満をぶつけていた。しかも言い出すと止まらないし。

「なんで俺ばつか、我慢してゐる訳？今時中坊でもカレカノ言つてゐる  
じやん。お前の事見るのも駄目つて？どうしてこいつをやるんだよ。

そんなの意味ねえし。無理だって、そんなの。」

だつて俺、お前の事になると、めちゃくちくなつちまつ。

俺たちがつき合つてゐるつて宣言して、お前の事教室まで迎えにいつたり、一緒に昼飯食つたり、手をつないで帰つたり、図書館の隅でいちゃこじたり、見せびらかしたり、おおっぴらに他の奴ら牽制したりしたいし・・・。

その時、彼女が猫の様にしなやかに俺の膝の上に乗つた。

「だから、馬鹿だつて。」

いらだつ俺の声と対局の、優しく甘くセレヤヘル声。

「言い訳を聞きたいだけなんだけどな。」

その言葉に俺は少し冷静になる。

「・・・・・俺がお前の事抱くのは、別にそういうタイミングで盛り  
がつくからぢやなくて、単純に、本当、お前の事好きだからで・・・  
・。・・・・愛してるから、つながりたいて思つうからで。他の誰  
でもいいくつもんぢやねえし、やっぱ、お前ぢやなきゃ・・・」  
最後、自分で言つて恥ずかしくなつて、声薄れて、こまかされて  
いるつて自覚は有つても、抗うなんてできやしねえ。チキンな俺。  
でも、それでも良い事はある。

「その言葉が欲しかつた。」

そつと彼女は俺の首に両腕を絡め、とびっきり甘いキスをした。

彼女の足の指をかむ。

「うん・・・・・」

声を抑えて身悶える姿が可愛くて、ぞわと舐め上げる。

「あつ！」

ジヤージの裾を噛み、とろけそうな彼女を剥き出しました。ほんの少し、隠すように、誘つように腰をくねらせる。

「すけべ。」

と囁く。そんな彼女に俺は溺れてる。

「そうだよ、すけべだよ。ってか、お前がそいつをねじやん。」

すると彼女は満足そうに小さく笑つた。

「本当、陽介つて馬鹿だ。」

その田が言つていた。きて、と。

へびい

第四話 俺が誰の事好きか分かつてんの？（後書き）

次回最終話です。

## 第五話　「ひにつのも幸せだね

家族が帰つてくるかもな、なんて事、その時の俺の念頭からはすっぽ抜けっていて、目が覚めた夜9時に慌てた。

「大丈夫。」

柔らかい唇が俺の耳を含み小さな音をたてた。

「兄貴研修で2日間留守だから。」

「という事は……俺の思い過ごしち？」

「これから一緒にお風呂入ろう。せっぱりしたら軽くつまむ物持つてベッド戻つて。朝になつたらも一度シャワー浴びて。それから朝ご飯にパンを買いにいくだろ？陽介が目玉焼き作つて、私がコーヒーを入れて。あさつての夜まで、陽介の妄想ライブラリーのフルコース、いかない？」

「えつえ、えつ……！」

俺は慌てた。そんな、願つてもいゝ、朝香に限つてあり得ないようなオファー……。

「嫌か？」

さも意地悪そうに彼女が微笑む。んな訳内だろ？！

答えるのももどかしく、俺は彼女を抱きしめていた。

「嬉しくないはずが無いだろ、この、馬鹿！」

あとから思えば、よくこの時の俺は“馬鹿”なんて言えたもん

だと思つ。

とにかく、舞い上がつてしまつた俺は、そのままもう一度彼女に恋つてヤツを注ぎ込んだ。

くたくたに啼き疲れ、それでも健気に目を開けようとする彼女のほんやりとした視線が俺の心をとらえて離さない。

「手えつないで買い出しここにつけ。」

「うん。」

「飯、一緒に作る。」

「うん。」

「Hプロンお揃いの有つた方が良いよな。」

「うん。」

「今晚カレーにサラダが食いたい。」

「うん。」

「デザートに、お前の体に生クリーム塗つても良い?」

「・・・うん。」

「キスマーク付けていい?」

「うん。」

指絡め、足絡め、嬉しいでいっぱいの気持ちで俺は彼女を抱きしめた。

「愛してる。」

実のところ、人一倍独占欲が強くて了見の狭い俺。彼女の事を誰かが見ていると気づいた瞬間、ムカつく。

経験だつたら断然俺のが上のはずなのに、いつも振りまわせされ、主導権握られ、イライラする。

でもこいつには敵わない。

「惚れた弱みつてヤツか。」

俺は彼女の首筋、制服からぎりぎりいっぱい見えてしまつ、もちろん彼女には見えない場所にキスマークを落とした。

たちの悪い俺のファンだかなんだか知らない奴らが

“ふさわしくない”

なんてちょっとかい出してくる事ぐらい予想つく。そんなのソックロ一蹴散らしてやるし。

知った顔の大人が

“強化選手なんだから不順異性行為は、云々”

言つて来てこいつに迷惑かかる事ぐらい想定内。大丈夫、俺、お前といたら結果出せるから。

「だからいい加減、諦める。」

つてな。

おわり  
ひみつのひ

## 第五話　いりこつのも幸せだね（後書き）

ツンデレ？

可愛らしい高校生カップルのお話でした。

この次のタイトルは“妄想ライブフレー”っていかがでしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5648d/>

---

ひみつのひ

2010年10月9日20時06分発行